

「我が至上の愛 アストレとセラドン」 ★★★

2009（平成21）年2月11日鑑賞<テアトル梅田>

監督・脚色：エリック・ロメール
 セラドン、アレクシ（羊飼いの青年）／アンディー・ジレ
 アストレ（羊飼いの少女）／ステファニー・クレイヤンクール
 レオニード（マダムの侍女、僧侶の姪）／セシル・カッセル
 ガラテ（ニンフのマダム）／ヴェロニク・レーモン
 シルヴィー（マダムの侍女）／ロゼット
 リシダス（セラドンの兄）／ジョスラン・キヴラン
 フィリス（リシダスの恋人）／マチルド・モニエ
 イラス／ロドルフ・ポリー
 アダマス（僧侶、レオニードの叔父）／セルジュ・レンコ
 セミールアルチュール・デュボン
 アマント／プリシラ・ガラン

2007年・フランス・イタリア・スペイン映画・109分

配給／アルシネテラン

<予告編でムラムラと・・・？>

私はこの映画の予告編を何度も観たが、それはアストレ役として映画初出演かつ主演した瑞々しいベルギーブリュッセル生まれの美女ステファニー・クレイヤンクールが右足の太ももを露わにした、しどけない姿で寝そべる官能的なシーン。偶然それを見かけた、こちらもすごいイケメン男セラドン（アンディー・ジレ）が彼女に近づき、思わずキスしようとするシーンに思わずムラムラ・・・？

他方、ちょっとした行き違いでアストレから「浮気をした男」と非難され、「2度と私の前に現れないで！」と命令されたことに絶望し、入水自殺を図ったセラドンを救ったのはニンフ（精霊）たち。セラドンの美しい顔だちに惹かれたニンフのマダム（城主？）であるガラテ（ヴェロニク・レーモン）が、左半分を大きくはだけた白いドレス姿で夢中になるシーンも予告編に登場していた。

アストレとセラドンという2人の羊飼いを主人公とした牧歌的なストーリーの中で展開される、そんなエロティックなシーンに期待感がいっぱい。そんなスケベおやじ的な関心と期待で映画館に入ったが・・・。

<ドルイドとは？>

この映画は、17世紀にパリの文学サロンで貴婦人たちの間で大流行した小説『アストレ』を映画化したもの。その時代は5世紀、舞台はローマ時代にガリアと呼ばれていた今のフランスの田園地方。その時代の羊飼いたちがどんな宗教心を持っていたのか私にはサッパリわからないが、この映画にはドルイド僧のアダマス（セルジュ・レンコ）が登場し、ストーリー展開上で大きな役割を果たす。ところで、あなたはドルイドって何のことか知ってる？

調べてみるとそれは、紀元前10世紀頃ライン川付近に発し、アイルランドにまで及んだケルト民族、ケルト人社会における祭司のこと。シーザーの『ガリア戦記』の記載以外にほとんど資料がないらしいが、ドルイドは神殿を構えず、森の奥の天体がよく見える地を選んで祭壇とし、樹木の中では特にパナケア（ヤドリギ）の巻きついたオーク材を神聖視したらしい。このように調べてみると、この映画にはそんなシーンがあちこちに。なるほど、あれは、これはそういう意味だったのか・・・。

このようにこの映画の宗教観は難解であるうえ、羊飼いの（平民）とドルイドやニンフのマダム（城主）との身分差別は強かったようだ。この映画をきちんと理解するためには、そんな点の勉強も必要・・・。

<エリック・ロメール監督の追い求めたテーマは貞節、だが・・・>

1920年生まれフランスの巨匠エリック・ロメール監督は年齢的な理由で本作を最後に引退するらしいが、1912年生まれの新藤兼人監督が今なお脚本や監督に意欲を燃やしているのだから、そんなことを言わずさらに頑張ってもらいたい。そんな巨匠に敬意を表するため（？）、この映画のパンフレットにはエリック・ロメール監督の詳しいインタビューが載っているが、これが理屈っぽくて難解。さらに、パンフレットにある山田宏一氏（映画評論家）の「エロか、エロか？——恋のゆくえは？」も、篠沢秀夫氏（学習院大学名誉教授）の「『アストレ』は恋愛技術の handbook も難しいから、身構えて読まなければ・・・。エリック・ロメール監督が一貫して扱っているテーマは「愛する者への貞節、忠誠（フェデリテ）」らしい。

セラドンとアストレの痴話喧嘩（？）の発端は、両家の親同士仲が悪いので2人が仲のいいところを見せるわけにいかず、セラドンが別の女性と仲良くダンスを踊っていたこと。それが少しエスカレートして、セラドンが相手の女性からキスされそうになったのがまずかったらしい。しかし、たったそれだけのことで「浮気だ！」「2度と私の前に現れないで！」と言うアストレはあまりにも厳しすぎるし、そう言われて入水自殺をしてしまうセラドンも気が弱すぎる。また、そんな争いはアストレの誤解から生まれたものだから、セラドンが生きているとわかればアストレはきっと誤解を解いてくれるはず。マダムの侍女でセラドンをマダムの城から逃がしてくれた侍女のレオニード（セシル・カッセル）や、その叔父さんであるアダマス（セルジュ・レンコ）がこのようにセラドンを説得しても、「2度と現れないで！」と言われたことにこだわり、アストレの口から自発的な許しの言葉が出るまでただひたすら待つことが、アストレへの忠誠を尽くすことだと考えるセラドンはかなりヘン。

時代が変わり、場所が変われば価値観が異なるのは当然だが、どうもエリック・ロメール監督が描く貞節、忠誠というテーマは、私のような浮気者にはわかりにくい。

<映画後半3分の1の展開は？>

この映画の良さは、美しい田園風景の中で展開される、美しい羊飼いたちのいかにも牧歌的な（子供じみた？）物語。そんなストーリーが前半3分の1で展開された後、中盤の3分の1は、顔かたちの美しさがマダムに気に入られたためマダムの城に軟禁状態にある（？）セラドンを、侍女のレオニードが逃がしてやったところから生まれるセラドンの葛藤劇。つまり、エリック・ロメール監督がテーマとする、アストレへの忠誠心に悩み葛藤するセラドンの姿だ。

それを救ったのは、アダマスからある提案。それは、セラドンに対してある手段を講じることによって、アダマスが主催する祭に参加してくるアストレやセラドンの兄リシダス（ジョスラン・キヴラン）、その恋人のフィリス（マチルド・モニエ）たちにセラドンを会わせること。ネタバレ覚悟で少しだけ説明すれば、「ある手段」とは美しい顔だちのセラドンを女装させ、アダマスの実の娘だと説明すれば、堂々とアストレたちと会うことができるというものだ。

最近私は、『花の生涯～梅蘭芳～』（08年）で京劇の女形と、『Beauty うつくしいもの』（07年）で村歌舞伎の女形の美しさを再確認したが、さて5世紀の羊飼いの男セラドンはいかなる女形に？またそこから生まれる新たな恋物語と結末は？

<この映画を好きになれない理由は？>

私がこの映画を好きになれない理由は2つある。第1はアダマスの娘に化け、アレクシと名乗るセラドンの女装姿に全然魅力を感じないこと。『花の生涯～梅蘭芳～』で余少群（ユイ・シャオチュン）が演じた青年時代の梅蘭芳の美しさには男の私でもゾクゾクとしたが、男性顔としてはイケメンでも、女に化けて美しいかどうかは全く別。また、京劇も歌舞伎も完全な白塗りをするから男顔を女顔にごまかせるが、アレクシ程度の中途半端な白塗りでは・・・？

第2は、かつての恋人がこの程度の化け方とこの程度の声色変化術で女として目の前に現れたら、アストレは簡単に「これはセラドンだ！」と見抜けるはずだと思うから、どうしても私にはその後の展開が陳腐に思えること。アストレが身分が全然違うアレクシと仲良くなれたことを不思議に思う友人たちは、アレクシの顔がセラドンに似ているとすぐに見抜いたのに、ホントにアストレは見抜けなかったの？

アダマス主催の祭が続く中、アストレとアレクシのベタベタぶりは次第にエスカレートしていき、最後にはあっと驚く結末を迎えるのだが、特に第2の不満が強い私にはそんな結末はナンセンス！さて、あなたのご意見は？

<中条評論について、ひとこと>

私は毎週金曜日に日経新聞夕刊の「シネマ万華鏡」を楽しみに読んでいるが、2月13日付夕刊はこの映画を取り上げ、映画評論家の中条省平氏は星5つの最高点をつけている。また、この映画を「物語の主眼は愛の忠誠にあるが、そんなお堅いテーマをこえて、なやましく匂いたつ官能の香りが陶酔を誘う」「ギリシア風の寛衣から女たちの乳房がこぼれ、気ぜわしく愛撫をかわす手の動きがなんともエロティックだ」「こんなに艶やかなシーンを撮りあげる監督が87歳で、これが最後の作品になるなんて」と絶賛している。

エロに関する中条氏のそんな評価はスケベおやじを自認する私も同じ感想。しかし、パンフレットのインタビューを読めば、エリック・ロメール監督がそんなスケベおやじ的視点とそれによる満足感を期待していないことは明らかだ。そう考えると「老いとも衰えとも無縁の、軽やかさにみちた汎神論的エロスの物語なのだ。こんな監督は映画史にも例を見ない」という評論は一人よがりだし、「これを映画の奇跡といわずしてなんといおう」という結びの褒め言葉も、少しピントがズレているのでは？

2009（平成21）年2月14日記